傾聴(和)の思想の起源は『詩経』の音楽の唱和である

浜村 良久
(防衛大学校人間文化学科)
唱和、傾聴、詩経

The idea of listening is derived from a chorus of music in The Book of Odes.

Yoshihisa HAMAMURA
(National Defense Academy)
chorus, listening, The Book of Odes

これまでの研究において、孔子、顔回は不違(無批判)の傾聴を唱え実践する人であったこと(浜村・水野, 2011)、傾聴は莊周へ伝えられて「和」と呼ばれ、『莊子』の「和而不唱」「心齋」の思想に結実したことが明らかになった(浜村, 2006, 2009)。しかし、①なぜ傾聴を「和」と呼ぶのか、②「和」の起源は何かについては明らかではなかった。そこで本研究では孔子が学園のテキストとした『詩経』の「和」の用例を検討し傾聴の「和」の起源を明らかにする(浜村・水野, 2012)。

1. 国風における合唱の「和」の用例 (1 例)

『詩経』鄭風「蘿兮」には「倡うれば予れ女に和さん(もしあなたが私を歌で誘うなら、私もあなたに歌で応えましょう)」とある。国風の「和す」とは同時に歌い始めることでなく、相手の独唱に応じて自分の歌を和す唱和のことである。構造的にも国風は発問と応答からなる詩が多く、唱和形式で歌われていたと考えられる。

2. 雅頌における合奏の「和」の用例 (11 例)

当時の楽師は盲人なので、指揮者の指揮で一斉に合奏はできず、ある楽器を先行させて他の楽器が和す唱和形式で合奏したはずである。孔子も「楽」を「始めて作すに翕如たり。これを従て純如たり、皦如たり、繹如たり(合奏は盛り上がるような金属の打楽器の鳴奏によって始まり、やがて諸楽器の自由な参加によってかもし出される純粋な調和、次いで管・弦・打楽などの各パートが代わる代わる独奏し、各種の音声が続いて絶えない)」「(『論語』八佾篇 23 章)」と言う。

『詩経』雅頌の「和」は従来、「和らぐ」と解されてきたが、鳥獣の鳴声や合奏の文脈で用いられているので、「唱和」と解釈できる。たとえば、小雅「伐木」第 1 章、

伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木。

嚶其鳴矣、求其友聲。相彼鳥矣、猶求友聲。

矧伊人矣、不求友生。神之聽之、終和且平。

の第 5、6 句では「嚶として其れ鳴く、其の友を求むる声」という。鳥は雄が囀って雌を誘い(唱)、雌が応える(和)ので、「終和」は友を求める声に応じて人や神も「ついに和す」と解釈できる。

また、「和楽」「和奏」「和鳴」も「楽(奏、鳴)を和す」と解釈できる。たとえば、小雅「鹿鳴」第 3 章、

呦呦鹿鳴、食野之芩。我有嘉賓、鼓瑟鼓琴、

和樂且湛。我有旨酒、以嘉樂嘉賓之心。

の「和楽」は、雌雄の鹿が呦呦と鳴き交わすように、瑟と琴が「代わる代わる独奏」(八佾篇 23 章)する(鼓瑟鼓琴、鼓瑟鼓琴)のであるから、「楽を和す」と解釈できる。

3. 雅頌における鈴の音、味の調和の用例 (4 例)

周頌「載見」の「和鈴」は車の鈴、小雅「蓼蕭」の「和鸞」は馬の鈴で、車馬の動き(唱)に応じて鈴がシャンシャンと「和す」ため「和鸞」「和鈴」と呼ばれるようになった。

小雅「賓之初筵」の「酒既和旨」、商頌「烈祖」の「亦有和羹」は酒やスープの美味を言う。料理で五味を調和させ、素

材のよさや味が引き立てあうようにするのを「和える」という。このように、『詩経』小雅・頌の「和」の用例も国風と同様、「唱を前提とする和」として一貫している。

4. 音楽の「和」から人間関係の「和」へ

演奏は直前までの旋律(唱)を受けて音を和し続けるプロセスなので、「唱和」は演奏の本質的要素である。孔子の弟子たちは盲の楽師に師事し、他の楽器の演奏の流れをよく聴き、自分の音を和していく「和」の精神を学んだ。従来の研究では「楽」を聴く立場から捉えたので、「和」は状態としての「調和」とされてきた。しかし「楽」を演奏する立場から捉えると、演奏は己を抑えて他者に聴き、自分の音や声を和す「和」の実践であることが分かる。演奏による「和」の実践は自己の修養となる(「楽に成る」泰伯篇 8 章)。これこそが孔子が詩楽を重視した理由であろう。

「唱を前提とする和」を人間関係に当てはめると、「和」は単に人に合わせることでなく、「相手にまず気持ちを話させ(唱)、それを大切に受け止めながら、共感と理解の気持ちを示す(和)」ことになる。「和」は常に相手に「唱」させることを前提としている。このように接してもらえると、人は自分の分かってほしいことを聴いてもらえた、理解されたと感じて心が和らぎ、相手に信頼が生じ、場が和やかになる。

孔子は「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」(子路篇 23 章)と言う。これを「唱を前提とする和」から捉えると、君子は相手の話(唱)を傾聴し共感と理解を示す(和)が、無闇に同調はしない(不同)。小人はすぐ雷同する(同)が、相手の心をまず理解し共感しようとし(不和)と解釈できる。

また、学而篇 12 章に「礼の用は和するを貴しと為す。先王の道も斯れを美しと為す。小大これに由るも行なはれざる所あるは、和するを知りて和せんとするも、礼を以てこれを節せざれば、亦た行なうべからざればなり」と言う。これも「礼」の効用には様々あるが、我を抑え、人にまず話させて(唱)傾聴し、相手に共感と理解を示す(和)ようになれることが最も素晴らしい効用であると解釈できる。「先王の道」とは『詩経』である。どんなことでも和を旨とするのがよいが、時にうまくいかないことがあるのは、和が大切だと分かって実行しても、礼で我を抑えない限り我執のため相手に共感を示し続けることができなくなるからであると解することができる。

以上のように、傾聴の思想の起源は『詩経』の「唱和」である。孔子は古来の「詩楽」の根底に「唱和」の思想を見出し、これを人間関係の傾聴にあてはめ、修養にも役立てようとした。孔子が弟子の教育に「詩楽」を重視したのは、弟子たちに「唱和」の思想を実践させるためであったのであろう。

引用文献

浜村良久, 2006, 中国古典研究, 51, 32-48.

浜村良久, 2009, 比較文化研究, 86, 17-28.

浜村良久・水野実, 2011, 新しい漢字漢文教育, 52, 17-26.

浜村良久・水野実, 2012, 東洋の思想と宗教, 29, 20-34.